

## 前書き



いにしえの人々は、目の前に広がる景色をどのように表現したのでしょうか。「雪」という言葉一つをとってみても、「淡雪」「細雪」「花卉雪」「六つの花」など、心惹かれるすてきな古語が数多く存在します。

本書は、そんな魅力的な古語の数々を、『大辞林第四版』から選び出し、まとめたものです。奈良時代から江戸時代までに用いられた言葉を幅広く収録しています。おおよそ一七〇〇項目を大きく六つのカテゴリーに分類し、気になる事柄・情景から言葉を探せるようにしました。古典作品の用例を多数掲載し、季語になるものには季節も示しています。

今の時代だからこそ引き立って見える、情感の豊かな古語との出会いをお楽しみいただければ幸いです。

夜	夕	朝	十二月	十一月	十月	九月	八月	七月	六月	五月	四月	三月	二月	一月	冬	秋	夏
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
128	124	120	118	116	114	113	111	109	108	107	105	103	102	99	97	96	95

空	雷	雲	風	露・霜・氷	雪	雨	星	日	月
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
46	44	41	36	34	31	25	21	18	10



前書き	この辞典の使い方
.....	.....
3	6

映える古語  
探し辞典

## 目次

さくいん	そのほかの動物	虫	鳥	動物	木	草	花	梅・桜	植物
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
172	170	167	160		150	140	134	132	

春	季節	時間	時	音・声	色	色・音	野	川・湖	山	海	地
.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....	.....
93	92	86		77	66		63	61	57	50	

この辞典に収録した言葉

六カテゴリー／四四テーマ／約一七〇〇項目

『大辞林第四版』の収録語で、古典作品に用いられる言葉のうち、特に情景を描写するための表現を選んで掲載しました。

奈良時代から江戸時代までに使われた言葉を幅広く収録しています。

カテゴリーとテーマ

以下の六つのカテゴリーを設け、それぞれに関連する語を分類しました。同テーマ内の言葉は、五十音順で並べています。

- 天……………天体や気象に関わる語
- 地……………海や山などの地上に関わる語
- 色・音……………色の名前や音、声に関わる語
- 時……………時の流れに関わる語

テーマの「二月」から「十二月」は、全て陰暦をもとに分類し、月の異名や主要な年中行事などを載せています。

- 植物……………草木などの植物に関わる語
- 動物……………鳥や虫などの動物に関わる語

雪

見出し  
あはゆき【淡雪】あ 現代仮名遣い  
うつつらと積もった やわらかで消えやすい春の雪。季語

あわゆき【泡雪・沫雪】あ 表記  
泡のようにとけやすい雪。

かざはな【風花】  
「かざはな」とも

①晴天にちらつく小雪片。降雪地から風に吹かれて飛来してくる小雪。季語  
②冬の初め頃に、風がざっと吹き、雪や雨がぱらつくこと。

用例  
「のうちは居つづけ煮えきらず」柳多賀屋通

こゆき【粉雪】  
粉のような細かい雪。こなゆき。出典



- 見出し仮名、表記、語義解説、用例は『大辞林第四版』に準じており、一部手を加えたところもあります。
- 見出し仮名は歴史的仮名遣いとし、拗音と促音は小字にしています。

- 漢字を中心とする書き方を【】の中に示しました。二つ以上の表記法がある場合は、より一般的と思われる順に「」で区切り、併記しています。表記や送り仮名は本書で示すものに限定されません。

- 現代仮名遣いが歴史的仮名遣いと異なるものについては、見出し仮名ないしは表記のすぐ下に、二行割りの平仮名で小さく示しました。なお、示し方は見出しの語構成を目安とし、異ならない部分については「―」で示しています。

- テーマの「二月」から「十二月」は、月の異名を以下のよつに示しています。

きんざらぎ【如月・衣更着・更衣】

陰暦二月の異名。季語 春

他にも以下の異名がある。

うめつさつき【梅つ五月】

うめみづき【梅見月】

くわてう【花朝】かち

- 解説の冒頭に、必要に応じて、語源・語誌、用法、清濁、表記情報などを「」で囲んで示しました。さらに詳述する場合は、補説欄として解説末尾に「」で囲んで示しました。

- 語義解説の複数ある語(多義語)については、テーマに関連する語義のみを掲げました。

- 語義を分ける場合、一般には①②③…を用いています。品詞・活用が異なる場合は●●●を用い、品詞・活用等の略称を( ) ( )で囲んで示しました。

品詞・活用等の略称一覧

(名)……………名詞

(動マ四)……………動詞マ行四段活用

(動マ下二)……………動詞マ行下二段活用

(形動ナリ)……………形容動詞ナリ活用

(副)……………副詞

- 解説内で、読みが難しいと考えられる語、誤読のおそれのある語には、その読み方を現代仮名遣いで示しました。

- 別の語形や同義語がある場合は解説末尾に示しました。そのうち古語にあたる語は歴史的仮名遣い

で示し、拗音と促音は小字にしています。

●季語として用いられるものは【季語】春のように、

【季語】のあとに新年・春・夏・秋・冬を示しました。

●歌枕とされているものは「歌枕」と示しました。

●テーマによってはそのテーマの末尾に、関連する枕詞をまとめています。

●用例は、❁のあとに「**歴史的仮名遣い**」によって示しました。読みやすさを考慮し、原典の仮名を漢字に改め、句読点・濁点を補うなどしたため、必ずしも原典のままではありません。

●用例中の「――」は見出し語を示しています。活用する語は、「――」の後に中点（・）で区切って活用語尾を示しました。連語・慣用句で、活用する部分が語幹・語尾の区別のできないものは、活用する部分の前までを「――」で略し、そのあとに活用する部分を送りました。

●用例中、語句の一部を省略した場合は「…」で示しました。また、必要に応じ、語句の注釈を（ ）で囲んで示しました。

●用例中の読み仮名は歴史的仮名遣いで示し、拗音と促音は小字にしています。

●用例の末尾には引用文献を（ ）で囲んで示して

います。主要な作品には巻名・章段名・部立てなどを小字で付記しました。近世の俳句は、作者名を（ ）で囲んで示しています。

●万葉集は「国歌大観番号」(旧)で示しました。また、日本書紀・古事記などの訓・訓注の部分はその旨を示しています。

●枕草子の章段は古典文学大系本(岩波書店刊)によります。

●漢字は、常用漢字表(平成二年一月三〇日内閣告示)および表外漢字字体表(平成二年二月八日国語審議会答申)に掲げられた字体を使用しています。

#### さくいん

●巻末に五十音のさくいん(索引)を置きました。見出し仮名の歴史的仮名遣いをもとに並べています。カテゴリーやテーマをまたいで語を検索する際にお使いいただけます。

天

## 月

## あかつきづくよ〔暁月夜〕

夜明け方に出ている月。有明の月。あかときづくよ。

❁ いとも面白ければ、舟を出してこぎ行く  
〔土左日記〕

## あさづくよ〔朝月夜〕

① 明け方の空に残っている月。有明の月。

❁ 我が寝たる衣の上ゆ—さやかに見れば〔万葉集七九〕

② 月が残っている明け方。

❁ 明けまく惜しみ〔万葉集一七六〕

## あめのおしで〔天の印〕

〔大空に押しした「押し手」の意〕月の別名。

❁ 久方の—やこれならむ〔清輔集〕

## あめのつき〔雨の月〕

陰暦八月十五夜の月が雨のために見えないこと。

〔季語〕秋

## いざよひのつき〔十六夜の月〕

陰暦（八月）一六日の夜の月。いさよふ月。

## いるさ〔入るさ〕

〔「さ」は時や方角を示す接尾語〕はいるとき。

はいる方角。和歌などでは「いるさのやま」にかけて用いられる。

❁ 里分かぬ影をば見れど行く月の—の山をた

れかたづぬる〔源氏物語未編花〕

## えんげつ〔偃月〕

半月よりやや細い月。弓張り月。また、その形。

## おぼろづき〔朧月〕

春の夜のほのかにかすんだ月。

❁ 春の夜のぼる御舟かな〔与謝蕪村〕

## おぼろづきよ〔朧月夜〕

〔「おぼろづくよ」とも〕

① おぼろ月の夜。おぼろ夜。〔季語〕春

② おぼろ月。

❁ 春の夜の—にしく物ぞなき〔新古今和歌集春上かげん〔下弦〕〕

満月から新月に至る中間頃の月。陰暦二二、三日頃、太陽との黄経差が二七〇度になるときの

## ありあけ〔有明〕

〔②が原義〕

① 夜明け方。

② 陰暦十六夜以後、月がまだ空に残っているが、夜が明けようとする頃。また、その頃の月。

❁ まだ—の空もをかきしき程に〔源氏物語鏡角〕

## ありあけがた〔有明方〕

月が残っている夜明け方の頃。

❁ 思ふこと—の月かげにあはれをそふるさを

しかの声〔金葉和歌集秋〕

## ありあけのつき〔有明の月〕

夜が明けて、なお空に残っている月。有明月。

❁ あさぼらけ—と見るまでに吉野の里に降れる白雪〔古今和歌集冬〕

る白雪〔古今和歌集冬〕

## いざよひ〔十六夜・猶予〕

〔動詞「いざよふ」の連用形から。上代は「いさよひ」〕陰暦（八月）一六日の月。また、陰暦一六日の夜。〔季語〕秋

❁ —もまた更科の郡かな〔松尾芭蕉〕

〔月の出が十五夜よりやや遅くなるのを、月がためらっていると見立てた語〕

月。月の左側が膨らみ、入りの際半月の弦が下向きとなる。

## かたわれづき〔片割れ月〕

半月。弓張り月。弦月。

## かつら〔桂〕

中国で、月にあるといわれる想像上の木。月の桂。

## かつらかぢ〔桂楫〕

〔か〕月の世界にあるという、桂の木で造った櫓。

❁ 天の海に月の船浮け—かけて漕ぐ見ゆ月人

〔万葉集三三三〕

## かつらのかげ〔桂の影〕

月の光。月影。

❁ —はのどけかるらむ〔源氏物語松風〕

## かつらをとこ〔桂男〕

① 月に住むという中国古代の伝説上の男。また、月を擬人化した異名。かつらを。

❁ —も同じ心に、あはれとや見たてまつるらむ〔狭衣物語四〕

② 美男子。

❁ 手にはとられぬ—の、ああいぶりは〔浄瑠璃〕

璃・出世景薄)

**かんげつ〔寒月〕**冬の夜空に皎皎<sup>せうせう</sup>とさえて見える月。寒い夜の

月。季語 冬

**ぎよくと〔玉兔〕**

〔月の中にウサギが棲むという伝説に基づく〕

月の異名。

**ぎんこう〔銀鈎〕**新月<sup>しんげつ</sup>のこと。**くだりづき〔降り月〕**

陰暦十八夜頃から二十一、二夜までの次第に欠けてゆく月。

**くりめいげつ〔粟名月〕**陰暦九月十三夜の月の別名。粟を供えて月見をする風習がある。豆名月。後<sup>の</sup>の月。季語 秋**げつくわ〔月華〕**

①月と花。

②月の光。月光。

**げんげつ〔弦月〕**★—星彩蒼蒼<sup>せいさいそうそう</sup>たり(太平記 三六)

上弦または下弦の月。ゆみはりづき。

**こげつ〔孤月〕**

ものさびしげに見える月。

**こもちづき〔小望月〕**

望月の前夜の月。陰暦一四日の月。季語 秋

**ささらえをとこ〔細好男〕**

〔「えをとこ」は愛すべき男の意〕月の異名。

★山のはの—天の原門渡<sup>たらの</sup>る光見らくし良し

も(万葉集 九八三)

**さんごのつき〔三五の月〕**

十五夜の月。特に、陰陽暦八月十五夜の月。

**さんごや〔三五夜〕**

十五夜。特に、陰陽暦八月十五日の夜。

**じぶごや〔十五夜〕**

①陰暦一五日の夜。満月の夜。

②陰暦八月一五日の夜。この夜、団子や芒<sup>すす</sup>の穂、果物などを供えて月をまつる。里芋などを供えるので、芋名月ともいう。かつては、これらの供え物を子供たちが持ち去るのを喜ぶ風習があった。仲秋。季語 秋

③風習があった。仲秋。季語 秋

④風習があった。仲秋。季語 秋

⑤風習があった。仲秋。季語 秋

⑥風習があった。仲秋。季語 秋

**じふさんや〔十三夜〕**

①陰暦一三日の夜。

の月。特に、陰暦八月一七日の月。立ち待ちの月。たちまち。季語 秋

**たまかつら〔玉桂〕**

〔「たま」は美称〕月の中にあるという桂の木。また、月の異名。

★恋ひわびぬ影をだに見じ—(新撰万葉集)

**つきあかり〔月明かり〕**

月の光で明るいこと。また、明るい月の光。

**つきかげ〔月影〕**

月の光で明るいこと。また、明るい月の光。

①月の光。月光。

②月の形。月の姿。

③月の光で照らし出された物の姿。

★ほの見奉り給へる—の御かたち(源氏物語 賢木)

**つきしろ〔月代〕**

月。

**つきしろ〔月代〕**

★—ガミエタ(日葡辞書)

**つきしろ〔月白・月代〕**

月の出頃に空が明るくなりかかっていること。

**季語 秋**

★—や膝に手を置く宵の宿(松尾芭蕉)

## つきのいろびと【月の色人】

月の美しさを擬人化している語。

- その名も——は、三五夜中の空に又（謡曲・羽衣）

## つきのかがみ【月の鏡】

①月を映す池の水を鏡にたとえた語。

●ひさかたの——となる水を（新後拾遺和歌集冬）

②明るく照る月を鏡にたとえた語。

●秋風は——をなほぞとぎける（権園歌集）

## つきのかほ【月の顔】

月の表面。また、月明かり。古く、対面することとは不吉とされた。

●——見るは忌むこと（竹取物語）

## つきのふね【月の船】

大空を海に見たて、月を船にたとえている語。

●——星の林に漕ぎ隠る見ゆ（万葉集一〇六八）

## つきのみやこ【月の都】

月の世界にあるという宮殿。月宮殿。

●——より、かぐや姫の迎へに（竹取物語）

## つきばえ【月映え】

月の光に照らされて、美しく映えること。

●ぬばたまの今夜の——霞みたるらむ（万葉集三四四八九）

## つくよみ【月夜見・月読み】

①月の異名。つきよみ。

●——の光に來ませ（万葉集六七〇）

②月の神。

●——の持てるをち水い取り来て（万葉集三四五）

## つくよみをとこ【月夜見男】

月を擬人化している語。月。

●み空ゆく——夕去らず（万葉集一三七二）

## なかばのつき【半ばの月】

①半月はんづき。

●涙ゆる——はかくるとも（太平記三）

②陰曆一五日の月。十五夜。特に中秋の名月。

●あまりに堪へぬ——、あら面白の折からやな

（謡曲・雨月）

## なごりのつき【名残の月】

①夜明けに空に残っている月。有明の月。残月。

②陰曆九月十三夜の月。その年最後の観月。後のちの名月。

●闇はあやなきを、——今少し心ことなり（源氏物語竹河）

## つきひと【月人】

月を擬人化している称。月人男。

●——の楓かほの枝の色付く見れば（万葉集三三〇）

## つきひとをとこ【月人男】

「月人」に同じ。

●仰ぎて待たむ——（万葉集二〇一〇）

## つきよ【月夜】

「古くは「つくよ」」月の照る夜。月の明るい夜。

季語 秋

## つきよがらす【月夜烏】

月の明るい晩に浮かれて鳴き出す烏。また、夜遊びする人のたとえ。

●爰は山かげ、森の下、——はいつもなく（狂言・花子）

①月の照る夜。月の明るい夜。

●——には門に出で立ち夕占ゆづり問ひ（万葉集七三〇）

## つくよ【月夜】

①月の照る夜。月の明るい夜。

●——には門に出で立ち夕占ゆづり問ひ（万葉集七三〇）

②月。

## ねまち【寝待ち】

「寝待ち月」の略。

●——を昨日といひて（宇津保物語春日篇）

## ねまちづき【寝待ち月】

「月の出が遅いので寝て待つ意」

①陰曆一九日の夜の月。特に、陰曆八月一九日の夜の月。臥ふしし待ち月。寝待ちの月。

季語 秋

②陰曆二〇日以後の月。

## のこりのつき【残りの月】

明け方まで空に残っている月。のこんの月。残月。

●「のこりのつき」の転。

## のこんのつき【残んの月】

「のこりのつき」の転。

●——は浮かめども（浄瑠璃・最明寺殿百人土麿）

## のちのつき【後の月】

陰曆八月十五夜に対して、九月十三夜の月。十三夜。季語 秋

●——庭に化物つくりけり（炭太紙）

三夜。季語 秋

## はつづき【初月】

新月。特に、陰曆八月初めの月。季語 秋